

## はじめに

はじめまして。松岡照代です。

簡単に、照ちゃんと呼んでください。

私は大阪に住む、二児の母です。2001年に結婚し、2004年に待望の我が子（長女）を出産するのですが、生後2カ月から重度のアレルギーを発症して、大変な子育てを経験しました。

生後8カ月に、離乳食で、カリフラワーを蒸し茹でしたものをあげたのですが、それで呼吸困難になる「アナフィラキシー症状」を発症しました。お医者さんに聞くと、その調理器具が、以前卵料理をしたことのある調理器具だったため、間接的に卵に反応して、アナフィラキシー症状を発症したと言われました（その当時のアレルギー検査 卵白 100以上UAE/ml）。

それからは、家の調理器具を一新し、いろんなものに神経を使う子育てが始まります。

なんで、こんなことになったんだろう？ アレルギーじゃなかったらよかったのに……、アレルギーじゃなかったら子育てが楽なのに……、と、どれだけ思ったことか。

待望の我が子を普通に育てることを夢見ていた私は、現実を受け止めることも難しく、嘆いてばかり、泣いてばかり。普通のアレルギーの子どもはいても、我が家ほど、重度のアレルギーっ子は近所にはおらず、たまたまベビーマッサージで声を掛けてもらったママさん（その方の長女さんも重度のアレルギーっ子）と、二人で泣き合ったり、慰め合ったりしていました。

そんな中、その友達が、役所で「アレルギーっ子つくしんぼの会」という親の会を紹介され、私はその友達と一緒に入会し、長女が生後11カ月からお世話になることになりました。そこには、同じように重度のアレルギーっ子がたくさんいて、その年齢層も広く（その当時高校生から赤ちゃんまで）、私は先輩たちに見守られ、アレルギーっ子の子育てをしました。「こんなときは、どうしたら、いいですか?」「あんなときは、どうしたらいいですか?」と、なんでも聞ける先輩たちに囲まれて、また、気持ちをはわかってくれる同世代の仲間もでき、どれだけ助かったかわかりません。でも、そのとき、思っていたことがあります。それは、アレルギーっ子の会は、ありがたいけれど、アレルギーが治った人は、会を辞めていくので、治った人の情報が少ないということ。アレルギーがいつまでも続く気持ちになり、「どうやったら、治るんだろう、誰か、教えてー!」と、いつも思っていました。

この「アレルギーっ子じゃなかったらよかったのに……」からアレルギーでよかつたんや、と思えるまでの日々をつれづれ」は、長女が小学1年生春から、小学校を卒業するまで、6年間連載していたアレルギーっ子の会の会報（年4回発行）を編集、加筆したものです。

長女が、保育所を卒業する頃、私は、あんなにも、「アレルギーっ子じゃなかったらよかつたのに……」と思っていたのに、「アレルギーでよかつたのかも……」と思い始めている自分に気がきました。そして、その痕跡を残して、後に続く人に読んでもらおうと思いました。なぜなら、本気で、「アレルギーっ子じゃなかったらよかつたのに……」と泣いていた私がいたから。

誰にも育児を任せることや頼める人がいず、まるで、一人つきりで育児をしているように孤独を感じていた私。「アレルギーっ子じゃなかったら、よかつたのに……」って、大泣きしていた私。アレルギーがどうやったら治るのか、知りたかつた私。アレルギーのことばかり考えていた私。

もし、そんな方がいたら、読んでいただけたら、幸いです。昔の私がいたら、「照ちゃん、どうやって、そうなった

か教えてほしい!!」って、聞くと思うから（笑）。

この本が、「アレルギーでよかった」と思える一筋の光になりますように。

松岡照代